

◆◆◆ 「ひまわり 6号」と「ひまわり 7号」の2機を用いて画像を提供

— 2月17日～18日 —

気象観測衛星「ひまわり」による気象観測は、西太平洋赤道上空の静止軌道に位置している「ひまわり 6号」により昼夜を分かたず行われており、そのデータは我が国はもとより各国の気象業務に広く活用されています。

「ひまわり」には、宇宙から地球を撮像・観測する機能のほかに、この撮像データを気象衛星センターで画像処理（投影法の変換、輝度温度の校正等）されたものを同センターから受け取り、利用者（受信局）へ送信する機能があります。いわば、カメラとしての目と処理された画像の中継配信のふたつの機能を備えています。これらにより、比較的簡単な受信装置で画像情報を利用することが可能になっています。

現在、東経140度上には「ひまわり 6号」が現用衛星として、また「ひまわり 7号」が東経145度の赤道上空には気象観測用の待機衛星として、それぞれ静止軌道上に位置しています。後者は、将来的には「ひまわり 6号」の後継機であり、かつ「ひまわり 6号」の障害時のバックアップシステムでもあり、両衛星により我が国の衛星気象観測がより強固なものとなっています。

気象庁では、2月17日（火）から18日（水）にかけて、「ひまわり 6号」に搭載されている赤外画像撮像用カメラの冷却部の保守のため同機による観測を約24時間にわたり中止します。この間、東経145度上の「ひまわり 7号」で取得した地球の画像データを気象衛星センターで処理加工後、「ひまわり 6号」を介して各地の利用者の受信装置（小規模利用局）に届けられます。この際、気象衛星センターでの画像処理のなかでは、東経145度の赤道上空から見た画像を東経140度上で見た画像への変換も行われます。これにより利用者は、受信アンテナを「ひまわり 7号」の方向に向け直すことなく、また、画像はあたかも東経140度の赤道上空で撮影されたものとして受け取ることが出来ます。これと同様の2機の静止気象衛星による観測画像の取得・配信は、平成15年5月から平成17年6月にかけて西太平洋の観測に米国の「GOES-9号」を用いた際にも行われました（「GOES-9号」で撮像観測、「ひまわり 5号」で配信）。

（気象庁の報道発表に当センターにて加筆）